ガロッティ&ラディーチェ

創業70周年―ガラスに宿る記憶を、未来の美へ

ガラス家具の先駆者、デザインとアートの境に佇むような繊細な作品で知られるガロッティ&ラディーチェ。創業70周年を迎えた今年、17世紀の名門貴族の館を舞台に特別展『Tales in Glass』を開催。過去・現在・未来の3章から成る会場には、過去の名作群と新コレクション、そして各国から選出された6組の女性デザイナーの新作が響き合います。その中には柴田文江さんの姿も。「ガラスは私たちのアルファベット、空間を描く鉛筆なのです」とCEOのシルヴィアさん。木工産地のブリアンツァでガラスを家具の主役へと押し上げた同社の歩みは、消費を超え継承されるデザインの力を体現します。「伝統とは〝生きた素材〟。オブジェが記憶と愛着を宿す時、機能を超えたコレクタブルな存在となります」。日本の格子に着想を得た柴田さんの「KOOSHI」は、光を濾過し静けさを編みます。ガラスと金属が生む浮遊感は、70年の記憶と革新が結ぶ未来の美を映していました。



Silvia Gallotti　シルヴィア・ガロッティ
創業家2代目、CEOとしてブランドを牽引。ガラスを軸にした美意識と職人技を継承し、表現領域をトータルリビングへと拡大。「ガラスは記憶、革新、持続可能性、感情を宿す表現媒体」と語る。

Shibata Fumie　柴田文江
プロダクトデザイナー。家具デザインからホテルのディレクションまで幅広く手がける。多摩美術大学教授。EDIDAをはじめ国際的デザイン賞多数受賞。欧州での活動の場を広げている。





上左・「過去の章」の名作アーカイブ。71年のランプ「Spirale」やテーブル「President」などが、卓越したガラス工芸とメタルジョイント技術を示す。上右・「現代の章」ではトータルリビングの新作が。右上・「未来の章」で発表された柴田さんの「KOOSHI」。高透過強化ガラスに色彩のグラデーションが手作業で施され、フォルムの奥に格子状の構造が浮かぶ。写真奥はドバイとカナダ拠点のラニア・ハメドさんによる「OMMI」。右下・多文化的背景をもつ6組の女性デザイナー。／ガロッティ＆ラディーチェ　http//www.gallottiradice.it

Gallotti&Radice



